

繪本淨瑠璃姫譚一卷

序

源曹子牛若丸の事跡ハ普く

蝶子文麿なるもの、此書を記す
其いにしへをいまに模写して、狂

世挙に布及す所なり、はじめ

に、参州矢はぎの長と聞へし、

纏線の裡より、累棋の危きに

浄留理媛の貞操を稽会し、

なれて潜行し、生立の後自から

巻中すべて善悪の報を縮て、

神人の術に達り、鬼没の妙を

其軸を朗かにす、是を閲するに

講明して、竟に雷名を世に鳴す、

文花開て、勇壮節烈、実に

眼中有精の客となるかごとし

予感称のあまり、序詞を投

じて、書坊の需に諾する而已

文化申仲秋

江戸 十返舎一九題

浄瑠理姫物語		
総目録		
二 卷之	一 卷之	
じょうり ころも ひめ のさと	くらま みづの やま ながれ	
三 卷之		
みぶのこぎる よこぶえ たびちのあらし もがさ		
四 卷之		
うつせみ かはべのきく うばがやど		
五 卷之		
源太夫 地蔵尊 いもせの盃		

浄瑠理媛物語巻一

京都 狂蝶子文麿 著

○ 鞍馬山

牛若丸の事ハ 中頃遮那王丸と改め給ひしかども
知やすきためにとてもの名にて記しつ 犬打童も口遊

になして、何のめづらしげもなし、されど浄瑠理節と

いへる謡物の名ハ、牛若丸の相馴給ひし、三河の国矢矧

の長者が娘、浄瑠理媛の事、作りしが初なれば、かゝる

節の謡物をバ、すべて浄瑠理とハいひならハしけるとぞ、

此頃の習ひにて、さやうの謡物に作りにし事どもを

新に実録のやう作かへて、勸善懲悪の助となせる

類、ひと多し、さればそゞのかされし人まねびに

其根元と聞えたる矢矧の物語つづりて見んと

おもふに、此媛の事慥なる伝記にハ見え、近き世

の物に記し置しハ、信用しがたし、されどなへての

人の口に残りて、あながちに根なし事ともおもハれ

ず、ここにおのれが乳母なるもの、添乳ながら寝物

かたりしつるを、今も猶ほのかにおぼえたれば、我と

ひとしき幼き人にも、はたかかる物語文すかせ給ふ

御前達の御覧じ給はんにもとて、嗚呼がましくも

書つけつれどもとより覚束なき事を、かたくなる

乳母が口に伝へ、おのれが忘れし所もあり、且ハ筆の

力の拙くて、書とりがたく、世にいひ伝へし所とも、相違

なること多かりぬべし、浄瑠璃媛の由来を記さん

とて、先牛若丸の事を記しつ、むかし後白河の帝

の御時、左馬頭義朝の朝臣の、乙の子にてぞおハシ

ける、兄弟の次第にてハ、八郎にておハしけれど、叔父

君、鎮西の八郎為朝の成果、目出度例しにあらず

とて、牛若ミづから元服の折、左馬の九郎と名のり

たまへバ、世にハ九郎殿とぞ申しける、生れ給ひし平治

元年の二月、父の義朝の朝臣、藤原の信頼が勧めに

従ひ給ひしに、軍に利なくして、明る二年の正月長

田が為に弑せられたまひぬ、牛若丸ハいまだ襦袢

におはして、同じ腹の兄たちと、共に忍びおハせしに

御母常盤御前、母の関屋にひかさされ、はた三人の

君達がかなくして、貞女をやぶりて、中納言清盛卿

の心に従がひしかバ、幸に御命ハ恙なくてぞおハシ

ける、されど清盛卿もさすが心がかりにおもひまして

平家の老臣ども、敵の子をいかにぞとて、兔角に申

旨あれば、兄弟三人とも、出家さすべきになりて、所々

の寺へぞ預られける、中にも牛若丸ハ、兄たちにも勝

れてことの外にかしかうおハしけれハ、小弓を引、竹馬に

跨がりても、大將軍の萌自然にあらハれける、四より

七ツまでハ、都の東山科といふ、幽かなる所におかれ

しが、常盤ハ牛若のかしこきを見るにつけてハ、却

て、人々に心おかるるも苦しく、さりとして遠き国へや
りて、見るかげもなき人になしたてんハ、口をしく、
平家の申すまゝにいよ／＼法師になして、跡とハせんと
おもひきはめて、鞍馬の別当東光坊の阿闍梨が許
に、人つかハしていはせけるハ、扱も故左馬頭殿の関東の子
に、牛若殿と申がさふらふ、見給ふやうに、平家の世ハ、次
第に盛とこそぞんずれ、さるにをんなの身として、
見あつらはんとも、心ぐるしく候へバ、御寺へ参らせてん、
御弟子となりて、経の一行も読覚候ハバ、生たけき
心ものどまりて、人も心をとめ候ハじ、さらバ身の上
安全なるべう候と、わりなく語ハれけるに、東光坊

兼て義朝の祈の師にておハせば、異議にもおよばず、
やがてかの山へぞ迎へられける、かくて牛若丸武士
道のミならず、何事にもさとくて、仏学をさへ輒明
らめたまへハ、かくてハ末の世の聖とも仰かれ給ひなん
あハれ此山の名譽ぞとて、一山の衆徒もほめ物に
ぞしける、さて月日立て、十五と申す秋の頃、都四条
の室町にすめる、正門坊といふ僧、御寺へ詣来ぬ、此
四条の聖ハ、東光房のしる人なりければ、逗留させけ
るに、ある日徒然なる夕、此法師宵まとひして、不思
議の夢をなん見ける、たとハバ是も某寺とも申すべき、
清らかなる堂の縁の方に、正門坊まだわらハにて、只

ひとり々居りけるに、我年ほどのうつくしき児、紅の
錦の衣着たるが、奥より出来ていひけるハ、爰ハ世の
常の人の参るべき所にあらねど、汝ハ父におくれて、
一旦法師になりぬとも、武士の心を忘れずして、身を
立名を揚んの心あれば、行末のあらまし事、こころえ
しらせんとて、主人なる人の待せ給ふなり、あの一間に入
て、余所ながら承ハれとて、伴ひて入る、其一間、まば
ゆきばかり麗しくて、向ひの方を見やれば、あるしと
見えつる老翁、頭残りなう白く、雪を欺くばかりの
鬚生ひて、尊げなるが、鈍色の道服着て座し給へり、
其方辺には、正門坊を誘ひしほどなる児、色々の錦

の衣着て、あまた居ならびたり、正門坊おづ／＼はひ出て、
いかなる事いふやらんと、またゝきもせず見てをるに、老
翁児に向ひて、の給ひけるやうハ、此程三河の国、矢矧の
長者、子をほしがりてあれど、彼者ハ子を持べき前因
あらず、然るに長者が妹なるもの、薬師如来の信者な
れば、如来哀れにおぼして、我に語らひ合せたまふ、
今宵人間界の客人もあれば、此翁が職分の由来詳
かに語りて聞せん、すべて人の胎内に宿りぬるハ、命数
の定まる所ありて、善悪替がたき事にハあれど、我
配偶の斟酌によりて生るゝ子の悪きも、善に替ハリ
ぬべし、抑須弥山の世界の中に大日本の国にては、

住古より玉を以て、尊きものにするが習ひなり、されば

和合の繩を結ぶに及ばず、各胎内に宿すに玉を用、

其玉にあらかしめ、陰陽の二ツありて、夫を以て配偶

を定む、もし一ツの玉を前身に得たるものハ、あながち

に、夫婦の道を行ふといへども、終身子を得る事叶

はず、我長者が妹の前身ハ、紫の玉ぞと覚へつるが、

はなれし玉なりや、しるしつるもの、取出て見よとの

給ふ、傍なる児立て、仰のまゝに一ツの筥を持きたりて、

中より唐の錦を表紙になし、水晶の軸つけたる巻

物取出たり、紐のかぎりまでいとうるハし、やがてよく

見ていひけるやうハ、長者が妹ハの給ふがごとく

紫にて、しかも離れたる玉にてハ候へども、是に公卿の

白き玉をあハせ候ハバ、いみしぎ子を儲くべくや候は

んと申、翁げにもとうなづき給ひ、さらバ其公卿なる

人、巻物にしるし置けとて、記させて、扱公卿ハ白き玉

なる人なれば、其子にすべき、白き玉をまいらすれと

の給へバ、ひとりの童子やがて持て来て、ひとつの白き

玉をまいらすれば、翁つくく<>と見給ひて、げに此玉も

いとうるハしうハあれど、是ハ公卿の子にすべき玉にあ

らず、其故ハすぎし年、都五条なる女にあたへし品

なり、件の公卿の子にしたる白玉と陰陽一对にて、と

もにいささの疵あり、兄弟和合をすべき、道理ハなきを職

分ぶんにおろかなるぞと呵しかり給たまへバ、傍かたはらなる今いまひとりの童子どうじ、
すこし年としたけたるが、会あひやく釈やくしていひけるハ、さように
しからせ給たまふな、此この度たび公びく卿ぎやうの子こにせんずる陰あんなの玉たまと、件くだん
の玉たまとハひとつ玉たま人が、造つくりて、件くだんの玉たまハいささの疵きず
ばかりにて、殊ことの外ほかに似にたる品しななれば、取とり違ちがへしなら
ん、猶なをよく筥はこの底そこさぐり見み給たまへよと初はじめの童子どうじにいへハ、
童子どうじやがて再ふたたび探さぐりて、誠まことにここに美び玉ぎよくの候ときひしを
あやまりしこそ、嗚おこ呼こがましく候ときへとて取とり出いだす、いまだ
箱はこを出いだしもあへぬに、あたりかゝやかしきばかりなり
翁おきな一目ひとめ見み給たまひて、悦よろこバしげに、そよ其その事ことをこそいひ
つれ、うるハしきの似にたることハ似にたれど、初はじめの玉たまにくら

ふれば、今いま一段いちだんの光ひかりにこそあれ、しかし忘わすれつるも
理ことなり、此この玉たまハ一旦いったん加か賀かの国くに、富とがし樫しの家いへに與あたへて、塵ちり
世よの汚けがれを受うけつれば、磨みがき直なをさせて、しばしがほど、目め
なれざりしものなれば、さもあらんかし、扱さてかやうに初はじめ
にもまさりたる光ひかりとなりたれば、五ご条てうの女むすめに授さづけし玉たま
よりも、まさりたる品しなにあハせてんとおもふハ、いかにと
の給たまふに、今いまひとりの童子どうじ承うけたまハリもあへず、仰おほせ
候ときハず、其その玉たまに合あすべき玉たまハ、いミじき品しなの候とき、不ふ思し議ぎ
なる事ことハ、それも五ご条てうの玉たまつくりたる者ものの造つくりしにて、
五ご条てうの玉たまよりハ、ことに麗うるしく候ときと申まをす、そはいづれに
ぞとの給たまへバ、されバ候ときそれハ去き年ねん左さ馬ま頭あたま義よし朝あさが

おもひものときハこぜん
妾、常盤御前にあたへおき候ひぬと申す、翁心地よげ
に打ゑミ給ひて、扱ハ我おもふやうなり、薬師如来の頼
給ひしかひありて、長者が妹も大將軍の聳とりすま
して満足にやあらん、さるにても五条のと、常盤が腹
のと二ツの陽の玉を同じ玉人がつくりて、また今初に
出せし玉と、此長者が妹にあたふべき品と二ツの陰の
玉も同じつくりてなるハ、因縁浅からぬ事なり、されバ
各々人間となりし後、疵ある方の劣りたる玉、疵なき
方の助となりぬべし、いで其玉を長者が妹にあたへ、
扱初に出せし玉ハ、三条の商人にやりて、金売吉次が
妹となすべしと仰せらる、仰を受し兒たち、承ハリて

坐をたちぬ、翁はるかに正門房が方を見おこせ給ひて
汝今ハ物の心もしらじ、後々おもひ寄る事のありぬ
べし、されど早く、世に洩んことを憚れば、汝が心に
得ん頃ほひハ、法師になりて十余年の後なるべし、
いざあの客人を、伴ひかへせとのたまへバ、例の紅ゐの児
きたりて、もと来し方へつれゆく、簀子を下りぬと思へバ、
松吹風の戸口に音づれて、燈の影のミあざやかなり、
あなめづらしや、なべての夢にハ、行すえをこそ諭し
給ふなるに、是ハ目の前なる事を、越方のさまにて告
たまふ、いと異やうなるぞかし、扱もかの翁ハわが国にて
ハむすぶの神といひ、異国にていふ、月下老君にてやま

しますらん、常盤が腹の御子をさして、大将との給
ひしハ、兼て聞し牛若殿にてやおハすらん必定なり、
年の程も叶ひたり、但し矢矧の長者といふハいかなる
人ならん、何れにもあれ、此鞍馬を出給ひて、東国にて
旗や上げ給ふらん、さるにても吉次が妹に生れ出し
もの、五条の誰にか添ならんなど、よろつおもひつゞく
るに、秋の夜の夜長うして、鐘の聞ゆるハまだ亥の
刻にてありけり、さてハあまりに夜も更ざりき、人しづまり
たるこそ幸なれ、わが下の心も打明し申さんとて、
牛若丸の例の学文所へ行バ、牛若すこし驚き給ひて、
親しからぬ御僧の、何事ありて夜中に来り給ふとの給ふ、

其顔つくくとうち守り、涙をほろくところぼして膝す
りよせていひけるハ、知らせたまハぬハ理なり、某こそ累
代の御家人にて、御父頭の殿の死出の御供申せし、鎌田
の次郎兵衛正清が子にて、今は法師の正門坊、俗にての
名ハ、三郎正親と名のりし者にて候へと申す、牛若丸
いよく驚きて、扱ハなつかしき人なり、相伝の郎党
のかたミなるかとて、いと嬉しげなれば、法師猶もさし
寄りて、某仏門に入て候へども、故殿の御敵、平家の
事ハ、おもひ出ぬ日とても候ハぬを、其君達にましく
て、うらめしくも、御大事をおぼしたゝせたまハぬ事
よといふ、牛若丸ハあまりの打つけなる事なれば、若

ハ、我^{われ}たばかり、平家^{へいけ}方の者^{もの}にかと、あやしミ給^こひて是^こハ
おもひもよらぬ事^{こと}こそ申^ませ、保元^{ほうけん}平治^{へいぢ}の乱^{みだれ}より、世^よハ
なべて平家^{へいけ}とこそなりつるを、蟪蛄^{たうらう}が牛車^{ぎゅうしゃ}のたとへ、誰^{たれ}
とても、語^{かた}らふ者^{もの}もなきものをとの給^{うた}ふ、疑^{うた}がひたまふは
尤^{もつとも}なりとおもひて、正門^{しやうもん}坊^{ぼう}が、一度^{いちど}男^{おとこ}となりしより
又^{はうし}法師^{ぼうし}になりたるまでの始^{しまつ}末^つ、つぶさに語^{かた}れハ初^{はじめ}て、
真^{しんじつ}実^{じつ}の心^{こころ}ぞとおぼして、牛若^{うしわかまる}丸^{まる}のの給^{おと}ひけるハ、我^{われ}とて
もさる心^{こころ}ざしハ、いかでおことにも劣^{おと}るべき、忘^{わす}るゝ折^{をり}も
あらぬをとの給^{ほうしうけたま}ふ、法師^{ぼうし}承^{かたち}ハリもあへす形^{かたち}つくろひし
て、さすがに声^{こゝ}ハ小^{こゝ}声^{こゝ}になし、耳^{みみ}へ口^{くち}当^{あて}ぬばかりにていひ
けるやうハ、平家^{へいけ}の繁^{はん}昌^{じやう}なることハ仰^{おほ}までも候^をはねど、天^{てん}

下^かの広^{ひろ}き、源^{げん}氏^じの多^{おほ}き佐^{すけ}殿^{どの}、蒲^{かば}殿^{どの}、源^{げん}三^{さん}位^み殿^{どの}を初^{はじめ}めとし、
河^か内^{うち}の石^い川^{しか}、近^{おう}江^みの佐^さ々^さ木^きなど、此^{この}正^ま親^ま法^ほ師^しがうけ給^こハリ
及^{およ}びたるだに、数^{かず}少^{すく}なくハ候^をはず、其^{その}外^{ほか}他^た門^{もん}の人^{ひと}々^{びと}なりと
も、或^{ある}ハ源^{げん}氏^じに恩^{おん}顧^この者^{もの}、あるひハ縁^{ゑん}者^{じや}のよしミにふれ
てハ、平家^{へいけ}を怨^{うら}ミぬ者^{もの}や候^をべき、表^{おもて}こそハ公^く界^{かい}に徒^{した}がへ、
今^{いま}にも御^{おん}大^{だい}事^じのおハさん^{さん}にハ、皆^{みな}御^{おん}方^{かた}人^{たうど}申^まぬべし、
あはれ御^み心^{こころ}決^{けつ}定^{てい}し給^{たま}へかしとて、さま／＼に申^ますゝ
む、扱^{さて}人^{ひと}や怪^{あや}しまんとて、其^{その}夜^よハおのがふしどへかへり
しが、其^{その}後^{のち}も人^{ひと}間^まを伺^{うか}がひて、しめやかにいひけるやうハ、
後^ご世^せのためにとて、此^{この}鞍^{くら}馬^ま寺^{でら}へ渡^{わた}らせ給^{たま}ふ御^{おん}方^{かた}を
剃^{そり}こぼちたるえせ法^{ほう}師^しが、修^{しゆ}羅^ら道^{だう}へそゝのかし参^まら

するハ、ほとけ 仏の御罰もおそろしけれど、てん 天の眼も照
覧あれ、くんぷ 君父の仇ハ、とも 俱に天をいただかざることわり
なれば、それに替ふべき功德、ほか 外にハ候ハじとぞ、絶
間なう勧め申ける、かゝる事聞たまひて、のち 後はひた
すら、ゆみや 弓箭の道をつミ心にかけて、がくもん 学文の方ハ、次
第におこたせたまひける、さてぶし 扱武士にならんハ早
業太刀打など、なら 習ハでハいささかの、ものあらそ 物争ひをすらし
づめがたし、たいぎ まして大義を企てんにハ、なに 何よりも肝要
なり、そのししやう 其師匠にハ、なにひと 何人をかたのまんとおもひ給ひけるが、
急度思ひ出し給ひて、ちから 人の力を師匠にせんよりも、
頼べき物こそあつたれと、うち 打つぶやき給ひけるが、ひる 昼ハ

ひとめ 人目あれば、つくへ さりげなく机にのミ寄居給ひ、よる 夜にな
りて、ひそ 密かに腹巻をしめ、こがねづく 金作の太刀佩て、僧正が
谷へ行給ふ、たのませ たのませ給ふものハ、もの いかなる物ぞ、ないけう 内教の祖
師か、げだう 外道の提婆かとおもふに、このたに 此谷に崇奉りて、とし 年
久しくなりたる、きふね 貴布祢の明神にてなんありける、
そも此僧正が谷と申すハ、むかし 昔いづれの御時にか、ごんそう 権僧
正快舜といひし、たつと いとも尊き聖の、おこな 行ひすまし給ひ
ける所にて、くらま 鞍馬の山のことの外なる奥にて、このおんかみ 此御神と
ても、その 其かミこそ靈験あらたに、わたら わたらせたまひつれ、ほとけ 仏
神の方便、げんとく 顕徳も世につれてや劣らせたまひけん、れい 鐸
の声鈴の音も、たへはて いつしか絶果たり、もとより險しき巖

のミなるに、天狗てんぐこたまの住家すみかとなりて、物のけのをめ
きさけぶなど沙汰さたすれば、此頃このころへ行通ゆきかよふ人の跡あとだに
見えず、古木こぼく生おひ茂しげりて、日ひの目見めぬ世界せかい、此世このよの外ほか
の心地こころちすれども、牛若丸うしわかまる八大事だいじの企くの山口やまくちにて、武道修ぶだうしゆ
錬れんの心こころしきりなれば、よろづのおそろしきハ何なにならず、か
くて明神みやうじんの前に至まへりて見給みふに、秋あきながら草深くさふかう
繁しげりたるを、やうくはらに払ひらひ除のけて、広前ひろまへに額ぬかつきての
給たまふやうハ、南無大慈大悲なむたいじたいひの明神みやうじん、わが氏神うじかみ八幡大菩薩はちまんだいぼさつ
に力ちからあハせ、わが一筋ひとすじの大願成就だいぐはんじやうじゆなさしめ、源氏げんじをして世よ
に榮さかえさせ給たまへ、さらんにハ先兵法まづひやうほうを我われに得えさせたまへ
など、祈誓きせいし給たまふ事ことしばしにて、やがて社やしろの前まへに立出たちいで

て、御眼怒おんまなこいからして、かたへに繁しげれる古木こぼくを平家へいけになぞら
へ、かやうにこそなさめとて、かの金作りこがねづくの太刀引たちひきぬきて、
枝打えだうちおとしつ切きりはらひつ、独業ひとりわざの太刀打たちうちし給たまふ、人
け遠とほくて怪あやしけなる所ところなれば、たゞ木くづたふ猿ざるのミ
ぞいと多おほかる、樵夫きこりだに來きぬところを、様さまかハリたる、
人影ひとかげかなとやおもひけん、此猿このざるども木の枝えだ、太刀たちと
ふりかざして、群むらがり來くる、牛若見うしわかみ給たまひて、老馬らうばにをし
へられて、道みちをしりし人もありけり、大望たいもうある身みの
稽古けいこせんたれに、誰たれかれの師匠しせうハ撰ゑらまじと覺おぼして、よき
相手あいてごさんなれ、しかし汝なんぢハ木太刀きだちなり、我刃われやいばにて打合うちあ
んハ、臆おそせるに似にたりとて、木の枝切きりて手てにとりあげ、

太刀をバ納めて打向ひ給へバ、猿ハ獸といへども心さが

くしく早くも此人我に仇する心なしとさとりけん、

面白くくるひめぐりて、かはるく打合ひけり、猿丸と申ハ

生れつき早業あれば、それに負けとて立まハリ給ふ、

げに御神の加護やましくけん、五体軽くなりたるや

うに覚えて、多くの猿どもを相手にして些ともおく

れをとり給はず、かくて暁方になれば、明日の夜を契り

て帰り給ひぬ、それより夜毎に、人々寝果ぬれば、則ち

かしこに行て祈念をはれば、猿どもと戦のまねびし

たまひ、扱人の起ざる明方にかへり給ふ、時刻も違へず

別人ハ交らず、かの猿ども友だちのやうに、馴れむつび

て帰り給ふにも、道迄ぞ送りまゐらせける、其ころこの

山の麓に樵夫を業とせる喜三太といふものあり、父

母に別れて後、主もなければ妻子もなく、貧しければ

人をも使はず、世の中に諛らはずして、いと勇ミたる

男なり、此頃僧正が谷に、盗人籠れりなど風聞する

を、如何なる者ぞ見定めてんとて、或夜いきて見るに、

貴船の社に向ひて来る者ありて、やがて社の中へ入バ、

我ハ社の後のくづれより這ひ入て、隅の方にひそよ

り伺かふ、さて牛若丸ハ満ずる七日にあたりぬれば、例

のやうに詣たまひ、用意しつる香炉取出て、前にす

ゑ給ひ、母君常盤御前より伝へ給ひつる、方の一本と

いふ香を焚せ給ふ、是ハ菊花の方に丁子加増したる

物なりとぞ、例の祈念高らかになし給ふに、盗人とのミ

おもひし、喜三太も初て此君なりと知ぬ、年に似合ぬ

おそろしき児かな、しかし梅檀ハ二葉よりといへば、尤

なる願事ぞとおもひをるに、あな不思議や、此香の煙り、

あたり立隠すと見る程に煙の中より菩薩とも申し

ぬべき、尊さの限りなき法師頭ハれ出給ひぬ、其すがた

あざやかに見ゆれば喜三太驚ひて見まハすに、折から

月の光り、きら／＼しうさし渡りて、社の中もさながら昼

中のやうなり、能々見るに月にハあらで松明なれば、是

ぞ盗人ぞ、幻術をして、人たぶらかすにかとおもへども、

はしたなく、走出んハ、拙なき仕業なりとて、猶も忍びつゝ

見れば、牛若丸ハ魂とられて、前後も知らずうつぶさ

にふしたり、しばしありて一ツの松明社の中へ入来れば、い

かなる盗人にかと見るに、人間にハあらで、年経たる猿に

てぞありける、老僧の前にひざまづきて、人のやうに物いふ、

仰られしやうに、小猿どもにいひつけて、此児を教へ立て候

に、わずか七日の修行にて候へども、数年鍛錬の者も、及

がたきほどになりて候と申す、老僧心地よげに声あげて

の給ひけるハ、神の御力も添たれば、さぞあらん、されど汝

等が指南も少々の手柄にハあらず、いしくも仕つたり、今

一人わが待人のありつるが、いかに来たりつるかと思たまへば、

さん候、戌亥杉の本に、またせ置候ひぬと答へぬ、さらハ
松明ども、堂の四面に残し置て、汝たちハとく帰れとの
給ふ、老たる猿あまたの小猿どもを呼つきて、手々に松明
どもを、或ハ木の枝へ立そへ、あるひハ堂の柱にゆひつけ
などして、各暇申して帰りぬ、曲々まで残りなう明か
なり、喜三太おもふに、此老法師一定神通を得し
畜生にて、人をとりなどするなるべし、されど此児を
心にかけて、教育するがあやしくもあるかな、われをも
見とがめやせんずらん、よし神仏の化現なりとも、瘦
法師一人、さばかりおそるべき事かハとて、つかく^{いづ}と出
れば、からだ俄にしびれて、おもはず、ついうづくまりぬ

老僧見かへりての給ひけるハ、おのれ喜三太、さのミ畏
るゝことなかれ、我ハ変化の物にあらず、音にも聞つら
ん、此山のいにしへ、此山に住果たりし、僧正快舜なり、
我しづかなる菴をトて、わりなく浮世の慾をはなれ
つれば、食物をだにほしとおもはず、其行むなしからず
して、終にハ仙術を得たり、風を友とし雨を子とし、天
を翔り、遠きに行き、飛行自在なる身なれども、住
なれし御寺の、さすがに離れがたくて、爰にのミ居り
ぬ、さるに凡俗の、清浄の地を穢さん事を厭ひ、さまく^{いづ}
の怪異をなし、かりに天魔の住所とおもハせてよせさ
りしをおそろしとおもはで、牛若丸ハ貴船へ参けい

なし、汝喜三太と外に今一人の者ハ、牛若の様子を伺がふ

此三人が、武勇の志神妙の至りなり、併是ミな前生の

因縁なり、我に対面して後ハ、世を世ともせぬ、平家の一

類滅して、天下を安穩になさん者どもなり、まづ其主

将とすべき児こそ、万人に仰がるべき大切の人なれ、よ

りて年頃召つかひたる、猿どもを相手にさせて兵法を

学ばせ、今日只今ミづから一卷の兵書を伝へぬ、詮ずる

所汝牛若丸と前縁の尽ず、上野の辺りにて、牛若丸が

ゆかりの者の助となりぬべし、されど未来の事ハ各心に

のミ箆て、ゆめくもらす事なかれ、よりて牛若丸の

魂を失ハせて、汝に告る事をしらせず、今一人の者をバ

又汝に隠しつ、必ずおもひ合する事あらんと給ふ、

やがて呪文を唱へ給へバ、香の名残の煙につれ、すがたも

ともに消失て、こたびハ森の樹木の、おびたたしう鳴動

すれば、身の毛よだちておそろしうなりぬ、牛若丸ハ

心つきて起あかり給ひ、今おもはずも魂を失ひし

間に、夢かとおもへバ夢にもあらず、此御社に僧正の

現形し給ひしと覚へつるが、奇怪の事よとて、かたへ

を見給へバ、頭に一卷の巻物あり、何ならんと取りて見

れば、兵法の書なり、嬉しくて懐にして、帰らんとし

給ふに、喜三太奥より踊り出て、盗人のしるべせし児、

生捕て恩賞にあづからんと声かくる、誰そと問ふ間

もあらしの誘へバ、松明残りなく消失ぬ、喜三太が山

刀のきたひ、いざ試ミよとて切かくれば、いひわけせんにも、

もどかして、抜合せたる刃と刃に、あやなき闇に、火

花を散して、追つ追れつ、社を出てぞ打合ける、牛若

丸喜三太が刀打おとして、下に引しき働かせず、我

ハ東光坊の、児の牛若なるが、貴船の神に大願ありて

参詣せしを、盗人とよハはるハ、無礼とやいはん、手向

こそ推参なれ、いでしや首を打落すぞとの給へば

喜三太ちつともわろびれず、からくと打笑ひて

君がほしと覚す首ハ、高平太清盛にて、おのれに

てハあるべからず、喜三太ごときの首、千万とらせ給ふ

とも、野間の内海の、御孝養にハなるべからず、平家の

権威を、奪はんとし給ふハ、盗人にあらで何とか申さん、

さやうの盗人には、望ミても方人すべし、されハそれと

知りつつ、御腕のほど試ミ申せしなり、さりととも殺し

給ふかといふ、膽たましひたぐならず、詞さハやかにいひ

放ちたれハ、手をゆるめて、いふ所誠なりやと問給ふに、

大丈夫に二言ハ申さすといふ、さらバよろづの物語り

せんとして、引おこし給ひて、ふたたび社の中へ入給ひぬ、例

の武芸の物語し給ふなるべし

○ 水のながれ

是ハ過にし保元の頃の事なり、都五条の辺に、堀口の君

平といふ商人あり、男子ハなくて娘一人もてり、名をハ小

雪とぞいひける、ミやびたること見習はせんとおもふに、

其頃伏見の中納言師仲卿と申す公卿おハしまして、

その北方より召れければ、参らせたりける、師仲卿にく

からぬものにおぼして、より／＼の御話らひありけるが、

此事父君平が耳に入ぬ、君平も有がたき事には

おもひながら、我身聳ながら養子となりて、此家の娘が

生ミし小雪なれば、さるべき聳とりて、家つがせざ

らんハ、本意ならしとおもひ、物の情もしらぬやうに、家

相続の事いひたてて御局より下させ給へと申ければ、

師仲卿ハあかぬ中におぼしけれど、申所も捨難くて

暇給はりぬ、やがて廉三という男にあハせけるに、二月といふに

ハただならぬ身となりて、今ハつゝミ難きほどになりぬ小

雪母にむかひて、世に恥かしうハ候へども、誠ハ師仲卿の

御種にて候ぞといふ、母驚きて夫の君平にいへバ、やが

て一間なる所へ子の廉三をよひて、君平がいひけるやう

ハ、いはじとハおもへども、いはで果べき事にもあらず、娘小

雪が事なり、幼きより常さまの宮仕に出せしを、此翁

にもつゝミて、いつしか中納言殿の御種宿したりき、かかる

としらバ初より、打明てもいふべかりしを、今更のやうにて、

我ながら面目もなし、あはれ翁があやまりとおもひて

此事沙汰し給ふな、ただ月足らずして、生れしといひ立

たまハバ、老たる身のいかに嬉しからんといへば、廉三ハ露腹立しけしきもなく、隠し男まうけたる筋にてハ候はず、いかて心にかへ候べき、まして此堀口の家、世々男子の生立少く、女にてのミ跡つぎたまへると承ハるに、左孕と聞けば、男子にや候はん、いと目出度事にて候、ましてやごとなき御胤こそ、ゆかしく候へとて、却りて悦バしげなれば、君平夫婦も心落給ぬ、廉三ハ小雪に向ひても、いささか恨ミもせず、心の限り大切に、懐胎の養せよといふ、扱なん家の内いとむつまじく、七月といふにぞ生れ出ける、おもひしやうに男子なりとて、悦ぶこと斜ならず、里若とぞ名付ける、師仲卿の御館にては、

殿ばかり知らせ給ふ事なりしが、男子と聞しめして、悦び給ふ初より、それとハなしに賜物などありて、とふらひたまひしが、後にハ心の鬼に人目をいとひ給ひ、後々成人せば、はからうべきやうもありなん、それまでハ絶て、知ぬ人にならんよし仰給ひて、其後打とけての御使ハなかりけり、かかるほどに保元の乱ありて、打つづき平治の騒ぎそ出来にける、義朝・信頼の企てよしなきことながら、平家悪しと覚す御方々、与力し給ふもありて、師仲卿にも其一味にてぞおハしける、されバ事破れて後、武家の地下にて、おハせんハ、御命にも及ばせ給ふべきを、堂上の御方にて由縁の捨がたかりし故とのミ仰開かせ

給へバ夫迄の罪にハ当らせがたく其年の師走に官を
解位を止められ給ひて明る年東の方へ配流せられ
給ひけり、其をりから北の方君達の御歎を見給ふには
初ハいとほしき事と覚し給ひし里若のかかる咎の
身に繋がれぬハ却りて幸なりとぞおぼしつゞけら
れける、里若ハ四ツの年なり、里若といふ名に打合ひて
年よりハさとく眼ざしするどくたち居振廻いかめしげ
なるやうにて武士の子ともいふべく公卿の御胤とハ見
えず、ましていやしげなるあそびをのミ好ミて印地打
をし木のぼりをし水遊ぎに妙を得て身の早きこと
より初めてすべての仕業富める者の子にハ似げなく

猿楽がましき程なり、君平夫婦を初め、父母も、是
ハいかなる、宿世にてやあらんとなげきけれど、生れつき
ハ心さまにハ引替ていと美しくて類すくなき総角の
児なり、十といふ年にぞ、師仲卿ハ赦免ありて、帰らせ
たまひける、今八年も隔たりぬ、連てまいれと仰けれバ、
小雪ともなひ参りて、さりげなしに見せ奉る、小雪がこ
とハ、おぼしきりたまへど、里若をバ御膝近く召れて、か
はゆくもあるかな、わが子となるべきかと、仰たまへど、里
若何とも御いらへもせず、小雪は傍痛おもひて育さま
あしくて、無骨にて候、いかなる事やらん、刀玉水あそび
などを好きて、公卿の御家に生れ出ぬが、中々打合ひ

やうに覚へ候と、ただ事のやうに申す、師仲卿のたまひ

けるハ、さやうにあやしと思ふな、子といふものハ、親より

ハ劣がちなる道理なれど、また親にまさるもあり、

人の本性ほど、さま／＼なるハなし、瞽瞍の子に舜と

申聖人のおハせし、其舜の御子に丹朱といふ、癡物の

生れたるも、すべて天道の仕わざにて、定めある事なり、

但市町にあらバ、よからぬ振まひも超過せん、この

参りつきしさハがしさも、過して我方へよびて、近

く召仕ハんと仰らる、かたじけなくうれしきむね、

御いらへ申して、其日ハかへりぬ、日数経て、さらハ里若

参らせよとて、迎の者あまたおこしたまへり、君平が

家の内の者とも、ミな／＼斜ならず、悦びて、父の廉三は

堀口の家の、興るべき時到りぬ、おこともし、中納言殿の

御家人とならバ、先祖にも立まさりし出世よとて、小雪

もろとも髪ゆひたて、衣服着せかへなどして、ぞゝめけど

も、里若ハ、うれしげなる顔もせずしていひけるハ、商人

にて、売買などせんハうるさし、さりとて公家を主にし

て、歌読事のミ聞んハ、又生ぬるし、主もなき野伏など

こそねがハしけれなど、けしからぬ事どもいひて、更

に行んけしきもなし、皆々あきれもし驚きもし、

さま／＼に拵へすかせバ、使の者どもも、とも／＼いひ

すゝめて、かならずゆき給はぬならバ、殿腹たち給ふべし、

へいせいとうわ 平生柔和なる殿の怒り給ふハ渡辺の綱ひつたてゆ
との いか わたなべ つな（引立）
きし 戻橋の鬼よりもおそろしかりなんなどおどして
もどりはし おに
しひてともなひ行く、かかるほどひまどりて加茂川の
ゆ
辺りを通るほどハ黄昏の頃なり、里若ハややともす
ほと とを たそがれ ころ さとわか
れバ川岸へあゆミ寄る、使のものはやく心得て兼
かハぎし よ つかひ こころえ かね
て聞き和君が好の水遊びなるか、けふ此川にてさや
きゝ わきみ すき みつあそ このかハ
うの事すべき事ならずとて、度々心をつけしが
たびたびこころ
ひまを見合せ川の中へ走入んとす、あれ留めよとて
みあハ かわ なか はしりいら とゝ
ひとびとおひ そで はな とら
人々追すがひて袖をひかゆれど引放ち肩を捕ふる
て
手の下かいくぐりて一をどり踊て水へずぶりと飛入ぬ
ひと おどり とひいり
あはや／＼と騒けども水ハしらず舟もなければ
さわ みづ ふね

せんかたなく、ところの
ふなびと 舟人よびて尋ねよ
たづ
などのゝしりさわぐ
ごんじ との まい はちぞう
権次ハ殿へ参れ、八三八
くんへい かた
君平が方へしらせよ
とて、あはて騒ぐ、やう／＼
ふなびと
に船人たづねきたり、
みづ
やがて水をくぐりて入
いり
ぬ、待間も心もとなく
まつま こころ
おもふに、日ハくれ
ひ
果ぬ、
はて

舟人水中より出来れど、

つれてハ出ず、いかにやいか

にとせき立て問へバ、事の

やうこそ稀有にて候へ、まづ

聞たまへ、某所々をうち

さがしつるに、向ひの岸に

目なれぬ穴の見えつれば、

それぞあやしやとて、這入

らんとせしその折から、水の

勢にはかにするどく、水中明く

てりわたりぬ、其あかりにて見

やりたれば、里若殿とおぼしきが、穴の中におは

したり、いで助け申さんとぞんじ、傍へ寄らんと

するに、忽ち闇うなりて見えず、はじめ童の傍に、

きよらかなる女の姿、ほのかに見え候ひしが、それが

声にてやあらん、汝長居せばよからじ、とくいねと申

つれば、さらぬだに水中の穴ハ、陸よりも物すこく

候へバ、いよ／＼おそろしくなりて、跡をも見ずして

出来りぬと、あへぎつついふ、此時廉三夫婦下人を連

て来り、中納言殿の郎党どもも、とる物もとりあへ

でまいりをりしが、此左右を聞て大におどろき、

希代の珍事にてこそありつれ、さらば其女ハ水

神にて、里若が命を召れしならん、扱八年経たる
大亀などの、化物になりたるが所為なるべし、いづれ
にもただ事にあらず、今たびハ大勢ゆきて、捕へて
来よといへど、誰もく眉を皺めて、それハ思ひも
寄らぬ事にて候、神にもあれ変化にもせよ、一度
見いれし物の、ふたたび帰へりし例の候はず、百万の
金給ふとも、命なくてハ何にか仕らん、あな恐しとて、
ミなく立てかへれば、人々も今ハいかにもせんす
べなし、今宵の事にハ叶ふべからず、又の日兎も角
もはからひてん、いづれにも命ハなき物なりと云て、
皆打なげく、小雪ハ殊にかなしミて、かかること

神のしらせ給へるか、殿へ参らん事を、殊のほか
いなミしを、しひて出しつるハ、吾すすめて殺せし
なりとて、打なきてともに、命捨ぬべしといふを、
さまくとおしなだめて、伴ひて帰りぬ、君平夫
婦も大にかなしミて、殊に手の中の物とられたら
ん心地なり、中納言殿の郎党どもも、其旨逐一
に告奉れば、驚かせ給ふ事大方ならず、不便の
事をせしかな、さるにても稀有の事なりとて、明
日所の者召て、猶尋出せとの給へば、その中に老たる
者の申けるハ、かしこハ近き頃、あやしき所なりと、
人の申て候、いたハしき御事ながら、すでにはかなく

なり給ひし上うへハ、あながちに亡屍なきがら、もとめ給ふとも、かひな
からん、此上このうへおそろしき祟たたりなり、よりにて誰々たれたれも得う
けがひ申さずと申す、げに理ことわりと覚おぼせば、たゞかひなき
追善供養ついでんくようのミぞせさせ給ひける、公卿くぎやうの御力おんちからにも及
はねバ、まして堀口ほりぐちが家いへにてハおもひ出るも涙なみだ催もよす
くさはひにて、いと哀あはれ頃ころほひにぞありける、爰こゝに又また
三条さんてうの商人あきうどに、吉兵衛きちびやうえといふ者ものあり、是ねんらい八年すみ来住
つきし、大福長者たいふくてうじやにて世よの人ひとのあまねく知しれる、かの
金売吉次かねうりきちじが親おやなり、堀口ほりぐちの君平くんへいとハ、兼かねてしたし
かりしかバ、里若さとわかが三ツといふ年としに当歳たうさいの娘妻むすめめあハ
さんと約束やくそくしけるを、此こたびかかる異変あへん出来できて、とも

どもにおどろきさわぐ、されど甲斐かひなき成果なりはててのち
吉兵衛妻きちびやうえつまに向むかひていひけるやうハ、いでやわがむすめの
白糸しらいとほど、果報くはほうの拙つたなきものハあらじ、あの里若さとわかといひ
しハ見み給みふがごとく、心こゝろばへの情々なさけしからぬが、聊いささ瑕きずの
やうなれど、生うまれかしこく、類たぐひまれなるうつくしき児ちごに
てありしを、あたら宝たからの聲むこかねを失うしなひつ、吉次きちじが為ための、
杖柱つえはしら折をりつるやうにおぼゆるぞとて、よそならぬ涙なみだに
袖そでをぬらせしが、堀口ほりぐちが方かたにてハ、白糸しらいと殿とのハまた稚おさなく
ておハせば、過すぎにし約束やくそくハ縁ゑんのあらぬ事ほうぐ反故ほんことなし
たまへといひおくりぬ、月日つきひも立たちて、白糸しらいと十三としの年としになり
ぬ、生おひ立たつままに限りかぎなううつくしければ、爰こゝかしこの

もの こひした 者ども恋慕ひて、むこぎみ 賀君の里若殿、さとわかとの なくならせ給ひつる
上ハ、うへ いで我にたまへ、われ 白糸どのならば、しらいと ただきに捧ても、ささげ
恥かましからずなどいふ、はづ 何がしくれがしあまたな
れバ、ふたおや 二親の心こころに定め兼て、かね いづれになりとも、おことが
心のまゝに、へんじ 返事してやらんといへど、しらいと 白糸ハ更さらに／＼、
いづれのをもうけひかず、やもめ わらハ寡あなになりつるハ、ものゝ
心こころわきまへぬほどにて候ひしかど、おとな かく長ながになりて後、のち
夫おつと申まをものの、おも 重おもき事ことを知りて候へバ、し いかでふたたび余
の人ひとに見え候まみハんとて、ひとすじ 一筋みさほに操まもをのミたてゝ、おとなし おとなしや
かにいらへをり、おとこ 男おとこもたせん事、と 取りいそぐべき年としにもあ
らねバとて、なかだち かなたの媒なへハよきにいひなし置ぬ、をき されど

おやこころ 親心せうがいにハ、くハふくこころ 生涯おんやうしの禍福うら心うらにかゝりて、おんやうし 陰陽師うらに占うらなハせ
ばやなどおもふに、やまと 大和くの国ものの者さうにんとて、さうにん よき相人さうにんのある
といへバ、み よびよせて見みす、さうにん 相人たびいく度むこもかんがえて、むこ 賀
撰えらミの事、いで の給いひ出しこそあやしけれ、ふくしや 福者さうの相
おハして、さだ 定さだまりたるむこぎみ 賀君そひはてに、さちびやう 添果さちびやう給さちびやうふなりといふ、さちびやう 吉兵
衛え打うち笑わらひ、なにごと 何事えいひ給えふぞ、やくそく はじめ約束そのおとこいたせし其男
ハ、すいし いつぞや水死すいしして候ひぬ、すぎ それ、むかしさた 過すぎにし昔沙汰むかしさたのあり
し、ほりくちくんへい 堀口君平まっせか孫さとわかの里若さとわかにて候ひしぞといへバ、さうにん 相人
聞きて、さて 扱さてハ賀君むこぎみハあさとわかの里若さとわかにて、すいし 水死すいしし給ひしとや、
某それがしせんねん先年みやこも都みやこへ参まいり、このほどまで 此程迄さいこくハ西国さいこくにありしが、さとわか 里若
殿とのハ、みやこのほ さきの都上みやこのほりの折逢あいまいらせしに、すいし 水死すいしの相さうハあ

らハれず候ひしが、哀れにもはた覚束なき事なり、
勿論親の跡つき給ふ人にてハおハせず、一たひ世に落ち
ふれ給ふべき相にてありしが、いかなる事にか其里若殿
の面ざし、今鞍馬に登ておハし給ふ、牛若殿に似させ給ひき、牛
若殿をハ山科におハせしとき、某相しまいらせて覚つるなり、
何にまれ此御娘も近きほどに他国へ行せ給ひて、未
の御幸こそ、たのもしくあらめといふ、吉兵衛ハ兎にかく
里若が、此世にながらへたるとの詞疑ハしけれと、たゞ
娘の身の上、めでたうといふを嬉しとおもひぬ、しかるに
吉兵衛明る年なくなりて、子の吉次親のなりハひを
受つぎぬ、是も父の世にありし程より、年毎に東国

に下て、万の商ひしける者なり、此頃鞍馬寺の多門天
信じ初て、寅の日には、まして懈怠なくぞ詣でける、妹の
白糸ハ牛若丸の姿、里若に似しと聞しより、東光
坊の辺りなつかしくなりて、我をも伴なひたまへと
いふ、吉次と白糸とハ、たゞ二人の兄弟にて、吉次親め
いていくくしミ、其中いとよかりければ、吉次戯れに
おことが心、われよく知りぬ、牛若丸を見まほしき
ならんといひつつ、打笑ひて次の寅にハ、かならずつれ
たちていくべしといひをりけるに、ある日三州矢矧の
長者、藤一といふ者尋ね来つ、東へ下る度毎に商ひ
がてら、度々宿りて、吉次が為にハ所得ある徳人なれ

ハ、吉次ミづから出むかへて、世にめづらしき客人ぞや、遠き
境へ何事のおハしてか、わたらせ給ひしといへば、長者
いひけるハ、おのれ兼て、和泉の国の一族を問ハんとぞん
ぜし折から、都見ぬ人あれば、誘ひあひて参りし帰さ
なり、和殿のなつかしさに、連なる者をバさきに帰し
つかハし、おのれのミたづね参りしなりといふ、やがて出居を
かきはらひ、さま／＼饗応して、扱白糸をも逢せける、長
者白糸が顔をつと打守りて、世にハ似たる人もおハす
ものかな、御妹の顔立、おのれが娘の浄瑠璃にさなが
らなり、雪恥かしき色の白さも、鼻のあたりあざや
かなるも、目つきといひ口つきといひ、露ばかりも違

所なし、さりとも年ハいくつにぞ、十四にてと答ふ、長
者又いひけるハ、扱ハ幸なる事なり、あまりに打つけ
なる事ながら、わが子に給ひなんや、よき聳とりて家
譲り参らせん、浄瑠璃と申ハ、おのれが姪にて、娘に
ハいたしたれど、誠ハ公卿の御子を養ひしなれば、
地下の者の跡つがせんハ、いとほしく候、いかでゆるし
給ひてんやといふ、まだいひ果ぬ内より、他国へ行て幸
あるべしといひし、相人の詞おもひ出て、吉次ハよき
事なりとおもふに白糸ハただうつむきてをりぬ、是ハ
男えらミする故ぞと、兄の吉次早うさととりて、長者
に向ひて答へけるやうハ、おもひよらぬ御仰、下種の身

にて、誠まことにうれしく候まことなり、しかし男女なんによともに、一生いっせうの
事ことハ、かりそめならぬ事ことにて、且かつハ物ものの心こころ知して候まことへば、
兄あににも知しらせず、おもひ定めさだめし、男おとこのあるまじきにも
候まことハねば、すなハちの御答みこたへハ、仕つかまつりがたくといへば、長者
げに／＼さも候まことハん、よくおもひ量はかり給まことへかして、外ほかの
物語ものがたりに移うつりて、其夜そのよ長者むかもとまり、ミなふしどへ入いりて
後のち、吉次きちじ、白糸しらいとに向むかひて、おここころが心こころいかにといへハ、白糸しらいと
いひけるやうハ、しらせ給まことふやうに、里若殿さとわかとのを恋こひわびしあ
まり、世よにあらせ給まことはぬ、甲斐かひなきにハ、似にたるときゝし、
牛若君うしわかきみをさへ、見奉みりたきほどの心地こころなれば、わらハ
が心こころから、男おとこまうくべきやうも候まことはず、里若殿さとわかとのに似に

たる男おとこの候まことハざらんとしにハ、年としたけ候まこととも、かくや姫ひめのやうに
寡住やもめずみせん心こころにて候まことへば、それをだにゆるし給まことハバ、三河みかは
更さらなり、心筑紫こころつくしの果はてへなりとも参候まじりハん、まして長者
に養やしなハれまいらするハ、いなまことにハ候まことはずといふ、またの日に
なりて、吉次きちじ此度このたびハ、里若さとわかが水死すいしの事ことを初はじめて白糸しらいとが
所存しよぜんのこりなく、くづし出いでてかたる、長者まことハ子こにこひ
うけん心こころしきりにて、の給まことふ心こころすべて理ことわりなり、いかにとも
しら糸しらいとどのの、の給まことふまままにすべし、もし好すきたまふ男
のなからんにハ、兄弟けうだいもあらぬ、浄瑠璃じやうるり媛ひめが事ことなれば、
うしろミして、一生いっせう寡やもめにてくらさるべしといふ、とミに
かたらひ出いで来て、親子おやこの盃さかづきしつ、長者ちやうじやまたいひけるハ、

遠とほき国くにの事ことなれば、わきく下くだらんハ事ことむつかし、此この
たび一いっしよ所しよにつれまいらすべしといふ、いなむべき筋すじにも
あらず、やがてそそのかしたてて、三みか河かの国くにへぞ伴ともなひける
矢やはぎ矧てうじやの長こと者が事ことも、浄じやう瑠るり媛ひめの事ことも、次つぎの卷まきに
て知しりたまへかし、

(落書き)

本屋さんごらんよ

たゞみせる

みらばみる たんとみる

みろく たゞみせる